

那覇大綱挽をめぐる人々の意識と知識

沢井 美弥

1. はじめに

沖縄県那覇市では、毎年体育の日の前日（日曜日）に「那覇大綱挽」という綱引き行事が行われる。使用される大綱は、「ギネス認定 世界一の綱」というキャッチフレーズがつけられており、それから分かる通り、“米藁で製作された世界一の綱”として、1995年にギネス認定登録されている。また、参加者もさまざま、地元の老若男女、観光客、外国人が一体となって綱を引く。

このように、今や世界的な綱引き行事となっている那覇大綱挽。さまざまな人々がいる中で、人々の意識や知識もさまざまなのではないだろうかと思い、調査を行いたいと思った。そして、実際に現地へ赴き、那覇大綱挽に参加する人々で、その中でも中心的な役割を担う那覇大綱挽保存会や地域の実行委員会、そして那覇市の一般の参加者を対象とし、それぞれの人々の那覇大綱挽への意識や那覇大綱挽についての知識を明らかにするべく、聞き取り調査を行った。

そして、その結果、那覇大綱挽への意識は、それぞれの人々がほぼ共通しており、また、ほかのまつりともおそらく共通しているだろうことが多かった。しかし、それに対して綱挽についての知識は、人によって微妙に異なっていたのである。今回は、人々の知識により重点を置いて、知識と知識を比べ、その性質を明らかにすることとする。

2. 綱引き行事について

(1) 日本の綱引き行事

『日本民俗大辞典』（2000）における「綱引き」の解説を以下にまとめていく。

藁で大綱を作り、地域を東西、南北、上下などに二分し、在と浜（農村と漁村）のようにムラが対抗して綱を引きあう行事で、豊作や健康を祈願する。勝敗は神意の表われとされ、山方の勝ちが豊作、海方の勝ちが豊漁など豊凶を占うことが多い。

年占の競技と見れば、舟漕ぎ、物奪い、相撲、競馬と共通性を持つ。ただし、南九州には子供組が綱を引いて村を回り、最後に綱で土俵を作って相撲をとるだけの所がある。勝負を競わない場合や、勝つ方があらかじめ決まっている地域もある。東北では小正月、関東の千葉・茨城、西日本や北九州は盆行事、南九州や奄美では8月15日（中秋の名月）に行うことが多い。

稲作地帯と畑作地帯で微妙な差異をみせながら、類似する世界観を表現する場合もある。

(2) 沖縄の綱引き行事

沖縄の綱引き行事はその形態、規模において独特なものである。綱の長さだけでも片方が百余メートルに及び、参加人数も数千名に達するものがある。地域によって、ひとつの村落が東と西もしくは北と南など、二手にわかれて綱を引く。綱は普通、雌雄綱と雌綱にわかれる。また、綱引き以外にもさまざまな芸能をともなっており、内容的にも多彩である。

今回調査の対象となる那覇大綱挽とあわせて「沖縄の三大綱引き」といわれている与那原よなばるや真栄里まえざとの綱引き行事も、インターネットにおける紹介文をまとめ、紹介していく。

与那原大綱曳

豊凶を祈る神事として始まった。東と西にわかれて雌雄の大綱の結合によって実りを予祝し、勝敗によって豊凶を占う伝統行事である。沖縄の歴史人物に扮装した支度（したく）を乗せて町を練り歩く。その姿はまるで龍を思わせるほど勇壮である。また、この綱引きに参加すると、無病息災、子孫繁栄の御利益があると町内外から何万人もの人々が参加する。

真栄里の綱曳き

稲の収穫時期とその予祝的性格をもっているとされている。集落が東（あがり）と西（いり）とに分かれ、雄綱と雌綱を毎年交代して引く。東のニライカナイから来訪神と幸と豊作を、西の現世に引きよせるための綱引きであるといわれている。西が勝つことによって、豊かな幸がもたらされるとされている。

那覇大綱挽

那覇市を東と西に分け、各地域の実行委員会がそれぞれの地域のシンボルである伝統の「旗頭」を先頭に、子どもたちが銅鑼（かに）や太鼓（てーく）、法螺貝（ぶら）などの伝統楽器を演奏しながら行進（うふんなすねーい）する。旗頭は平均して 55 キロの重さがあり、股引半套（むむぬちはんたー）という独特の黒衣装をまとった青年たちが協力して躍らせる。旗頭を見事に舞わせる青年は尊敬され、誤って倒れたりすると末代までの恥辱になるため、練習では青年たちは真剣である。また、行列参加者は 1 実行委員会平均 150 人程度で、それが 14 実行委員会あり、その他合計 2500 人が参加し、沿道の見物人は 10 万人を越す。

沖縄県知事や那覇市長あいさつなどの公式行事の後、沖縄伝統の空手、太鼓の演舞、綱寄せ、頭貫棒（かぬちぼう）入れを行い、支度（したく）による我栄（がーえー）で氣勢を上げ綱挽ムードを盛り上げる。

綱挽勝負は 1 回のみ。5 メートル引き込んだ方が勝ちになる。約 15,000 人が引く。引き終わった綱を持ち帰ると、一年を幸せに過ごせるといわれている。

3. 人々の知識とその性質：渡邊欣雄（1990）の見解をもとに

今回、那覇大綱挽における知識をみていくにあたって、渡邊（1990）の著書である

『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』が非常に参考になるので、一部ではあるが、参考となる部分の内容を以下にまとめていく。また、渡邊は、同書の中で話者の知識を「民俗的知識」と総称している。

(1) 民俗的知識の重要性

渡邊(1990)によると、沖縄のように、人類学者を中心として、ひとつのコミュニティに複数の研究者が接触してそれぞれが互いに異なる研究を展開し、現在もそれを増進しているというあり方やそれにもなう問題が数々とりあげられてきた地域はなおさら、何にもまして話者の主観やその知識の性質が問題とされなければいけないという。そして、それがなぜ重要な問題となるかという理由としては、民俗的知識には「成層性」、「正当性」、「拮抗性」、そして「伝統性」・「非伝統性」があり、これだけの知識の不均質性、可塑性、可変性が指摘できるとすれば、わたしたちはあらためて情報源としての話者の知識のさまざまな特質に関して、再考を試みる必要性が生じてくるはずだからということが述べられている。

では、次に、渡邊(1990)が具体的に示した民俗的知識のさまざまな性質をまとめていく。

(2) 民俗的知識の性質

民俗的知識の「成層性」

知識には正当な知識(正しい知識)としからざる知識(あいまいな知識、あるいは間違っただ知識)という知識の「質」的な差がある。また、よく知っているという知識状態とあまりよく知らない、あるいはまったく知らないという知識状態、つまり知識の「量」的な差がある。

コミュニティ内部には特定個人が固有の知識をもちうる地位や特権がさまざま存在している。このことから、知識の差は特定個人の地位や特権の差に基づいているということが分かる。

「すべてを知っている」とする知識を「全知」というなら、その一部しか知らないという知識を「部知」、まったく知らないという知識状態を「無知」、そして「全知」にてらして違っているか間違っている知識を「偽知」ということができるだろう。こういった知識状態がそろると、知識は成層性を帯びているということになる。しかし、この知識の成層性は、知識の「量」においていえることであり、必ずしも知識の「質」において成層性を保証しているわけではない。

民俗的知識の「正当性」

知識が新しい世代に受け継がれていくような場合に、「正当化」が必然的に生じてくる。つまり、コミュニティの伝統的知識の担い手が伝統的知識の正しさを受け手に対して説明し、受け手にもっともらしく思う主観を形成していくという正しさの証明が行われるのである。

民俗的知識の「拮抗性」

民俗的知識には、コミュニティ内部における知識の闘争や葛藤がある。知識に成層性があるということは、ある知識や見解・解釈に対して支持する知識があり、かつその逆に不支持もあるということである。同一の神話や儀礼に対して、その解釈に関し、違った2つあるいはそれ以上の解釈の相違が、同一のコミュニティ内部に併存している。

民俗的知識の「伝統性」・「非伝統性」

民俗的知識は個人のうちに変化しうる特徴をもっている。コミュニティにおいては、前代の知識を極力継承していこうとする反面、前代にはなかった知識を獲得しようとする要求がある。前者を「知識の伝統性」というならば、後者を「知識の非伝統性であり創造性」といえる。前代の知識を継承するうえで、伝えられるべきものすべてが伝承されているとは限らないということである。あるいは、何を伝えるべきかは前代の知識をもつ者の判断によっており、何を受け継ぐべきかは後代の知識の学習者によっているということでもあろう。民俗的知識の伝達は、このようにメッセージの送り手と受け手双方の間で双方の判断が働き、取捨選択されている可能性は十分にあると考えてもいいだろう。

4．那覇大綱挽をめぐる意識と知識

話者が那覇大綱挽について話してくれたことを、以下にまとめていく。その際に、最も関心のあると思われることや中心になった話題に注目していく。

(1) 那覇大綱挽保存会

那覇大綱挽保存会は、那覇大綱挽において中心的役割を担っている。

A氏は、元那覇大綱挽保存会理事長で、大綱の製作にも携わっていたり、本番で安全祈願を行ったりさまざま。那覇大綱挽の歴史、那覇大綱挽に込める思いなど、さまざまなことを話してくれた。その中でも、特に関心があると思われることがふたつあった。ひとつは、那覇大綱挽が“人間作り”の場であるということである。「綱挽に参加することは、協力意識や共同意識を生む」、「人の前に出ることは、素直性や表現性を育む」というようなことを熱心に話してくれた。もうひとつは、那覇大綱挽が儀礼としての意味をもつということである。「那覇市を東と西に分けて、東側は雄（男、父親、神様、天）で西側は雌（女、母親、畑、地）であると象徴している」、「地球の自転にあわせている。よって、北と南ではいけない」、「西側が勝てば東側の世果報（ゆがふー）を引っぱりこむことができる」というようなことを話してくれた。これらの話は、地元の子どもたちにも積極的に話す機会を設け、まつりやその伝統を守ることの重要性を伝えている。

また、A氏のほかに、那覇大綱挽において「綱方」という役割であるB氏が、雑誌のインタビューを受けているところを偶然耳にすることができた。「1年の中で正月

よりも綱挽のほうが重要」、「そのために生きている」、「近づいたり練習が始まったりすると、『いよいよ今年も…』と思う」、「血が騒ぐ」、「やめられない」というようなことを中心に話しており、このことから、那覇大綱挽を生きがいと感じているということがわかる。さらに、『負けたくない』ではなく、『勝ちたい』と話していたことから、勝つことへの強い意識を感じとることができるし、「伝統をしっかり受け継いでいる」、「10代、20代にも引き継いでいる」ということから、伝統への意識も感じられた。インタビューの内容にもよると思うのだが、A氏が話してくれたような、那覇大綱挽が儀礼的な意味をもつという話は出てこなかった。

(2) 那覇大綱挽安里実行委員会

那覇大綱挽において、大綱とともにもうひとつの見せものである「旗頭」の安里実行委員会である。また、地域としては、安里は那覇市の東の側である。

実行委員会の中でも年配のC氏は、那覇大綱挽や旗頭の歴史を中心に話してくれた。また、「いろいろな人が参加しているから、地元意識はあまりない」ということや、「子供たちに貴重な経験をしてもらいたい」ということも話していた。こうして、しばらくそういった話を聞いていた。年配ということもあり、A氏と同様に、さまざまなことを話してくれるのではと期待していたのだが、那覇大綱挽が儀礼的な意味をもつという話は出てこなかった。よって、A氏が話してくれた「東と西にわかれ、西側が勝てば東側の世果報（ゆがふ一）を引っぱりこむことができる」という話が那覇大綱挽にはあると教えたところ、C氏は「東側が勝てば海の幸、西側が勝てば山の幸」、「ほんとうは北と南に分かれる」という、A氏の話とは微妙に異なることを話したのである。

また、実行委員会の中の旗頭青年団であるD氏や高校生数人にも話を聞いてみたところ、「綱挽よりは旗頭を誇りに思っている」というように、自分たちが実際にやっている旗頭のほうをより誇りに思っているようだ。また、C氏と同様にA氏の話を読んだところ、「聞いたことがない」というのがほとんどであった。

(3) 一般の参加者

県庁に勤務するE氏は、那覇生まれ那覇育ちだが、那覇大綱挽には一般の参加者として観光客たちに混ざって参加している。『那覇大綱挽』とは知っているけれども、那覇市民だけでなくいろいろな人が参加しているから、“まつり”というよりは国際的な“イベント”というかんじだという。「参加するのは地元の人々だけというのではなく、いろいろな人がいてもいい」、「『また来年ここで会おう』などというように、交流があってもいい」というように、さまざまな人々との交流の場として感じているようであるし、同時に「地元の人々として、那覇大綱挽は喜び」、「那覇を出ていった人たちが帰ってくるいい機会になる」などという地元のまつりという意識もあるようだ。さらに、「子どもたちが楽しんでいることがうれしい」ということを話し

てくれたり、「裏方の人たちの苦勞を考えると、『大事にしないと』という気持ちになる」というように、伝統への意識も少しではあるが感じられた。また、安里実行委員会の人々と同様に、A氏の話を読んだところ、「東と西の意識は特にな」と話してくれたが、実際のところは知らなかったようである。

5. 分析

4章で示した人々の意識と知識について分析していく。その際に、知識に関しては、3章で示した渡邊(1990)による民俗的知識の性質をもとに、那覇大綱挽をめぐる人々の知識間にはどのような性質があるのか分析していく。

(1) 意識

参加する形は異なっているけれども、人々のそれぞれがみな、自分たちのまつりを誇りに思っているようであるし、子どもたちに楽しんでもらいたいようである。そこから、伝統の継承へつなげようとしているのだと思う。これらは、那覇大綱挽にかかわらず、ほかのまつりに関わる人々にとっても共通なことなのではないだろうか。

しかし、“地元”という意識があまりないということだけは、ほかのまつりに関わる人々にとっても共通なことであるとはいえないであろう。使用される大綱が、その大きさがギネス認定登録され、参加者もさまざまとなり、世界的な行事になったからこそ、“地元”という意識はなくなってしまったのであろう。

(2) 知識

今回は、知識の中でも儀礼的知識、特に「象徴的知識」において、違いがはっきりと表れた。

A氏の知識は、那覇大綱挽における地位とともにその知識は最高の水準にあり、人々にとって「全知」であろう。C氏の知識は、一部がA氏と共通しているという「部知」であり、かつ、A氏とは異なるという「偽知」であるともいえる。異なる要因としては、沖縄には綱引き行事が多いということがあげられる。地域によって、綱引きの象徴するものが異なっており、それらが混在してしまった結果ではないだろうか。また、実行委員会の中でもD氏のような若い世代の人や10～20代の若者、一般の参加者は、「無知」である。

以上のことから、那覇大綱挽における象徴的知識は、那覇大綱挽保存会を頂点とする「成層性」を帯びていることがわかる。しかし、那覇大綱挽については、沖縄戦で文献や資料などが消失してしまい、明確な起源などを知ることは困難であるという。よって、象徴的知識も、明確にどれが正しくてどれが正しくないなどという判断はできない。このことから、この知識の成層性というのは、知識が豊富かそうでないかという「量」においてのみいえることである。渡邊が『象徴的知識』は民俗知識のなかで最も変化しやすく、かつ、ともすれば個人的知識となりやすい知識だった。」と

指摘するように、那覇大綱挽をめぐる知識はもはや個人的知識なのかもしれない。

6. まとめ

今回、那覇大綱挽をめぐる人々の意識と知識を調査してみて、一般的にはほかのまつりと共通する意識や、それに対し、独特の意識や知識のありようを確認することができた。那覇大綱挽が世界的行事となったことや、沖縄にはほかにもさまざまな綱引き行事が存在するということが要因としてあげられる。

また、ほかにも、今回は詳しくふれることはなかったが、興味深い話がいくつかあった。那覇大綱挽では、身内に不幸があった年は、参加してはいけないという。このことは、那覇の大綱は祝い綱であるということが理由である。那覇大綱挽における旗頭は、那覇の「覇（はたがしら）」という字をかけているという。「覇」とは、「武力や謀術で天下を従えるもの」という意味である。よって、旗頭は権威をあらわす象徴でもあるという。このふたつは、A氏が話してくれた。また、これは自分で確認したのだが、「はたがしら 村のシンボル まもり神」ということばがあった。このことから、旗頭は、神様をおろす「依り代」で、それをもち、町を歩くことで、災いなどのもとを追いはらうことができるということが考えられる。

参考文献

- 那覇大綱挽保存会（2000）『那覇大綱挽 NAHA GIANT TUG-OF-WAR』新報出版社
—————（2006）『那覇大綱挽 NAHA GIANT TUG-OF-WAR』（パンフレット）
比嘉政夫（1998）『沖縄を識る—琉球列島の神話と祭り—』、財団法人歴史民俗博物館振興会
福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（編）（2000）『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館
渡邊欣雄（1990）『民俗知識論の課題—沖縄の知識分類学—』凱風社

参考ウェブサイト

- 「与那原大綱曳」<http://www13.plala.or.jp/kemonomiti/gyouji/maezato.htm>
「真栄里大綱引き」<http://www.yonabaru.jp/tunahiki.htm>